

タイトル  
「化け物退治はスカートの中で」

P N  
K Y  
K Y

ログライン  
パンツに潜む魔物から女の子を救う為に  
捜査官がスカートめくりをする話

人物表

アラギ	(29)	∴ 化け物「カゲ」を追う捜査官
ミカ	(17)	∴ 勝気な少女。カゲに狙われる
シバタ	(18)	∴ ミカのがれの先輩。イケメン
カゲ	(?)	∴ 化け物。ミカに乗り移る
母	(45)	∴ ミカの母親
弟	(12)	∴ ミカの弟

○住宅地の路地裏 夕方六時ごろ

白スーツに銃を持った男アラギ(29)が三人の男に囲まれている

三人の男は目が赤く光っている。

そのうち二人がアラギに襲い掛かるが、アラギこれを返り討ちに。倒れた二人に銃を撃つと光線が放たれ、倒れた男たちから黒い煙のようなものが霧散していく。

男 「ぐっ：おのれ！」

アラギ 「終わりだ（銃口を向けつつ）」

男 「こうなればやむを得ん！」

男の体から黒い球体が飛び出し凄いスピードで飛んで逃げていく。

アラギ 「：ち！」

アラギ銃をしまい、スマホを取り出す。スマホ画面を見ながら追いかける。

○ミカの家 脱衣所 夕方六時ごろ

ミカ(17)、シャワー中。脱衣所の黒いパンツに窓から入ってきた黒い球体が乗り移る。ミカ、シャワーから出てきてその黒いパンツをはき、スカートをはく。

○同 リビング

ミカの母(45)、弟(12)が二人で食事している。そこへミカが廊下から呼びかける。

ミカ 「お風呂空いたよ！じや行ってくるね！」

母 「ご機嫌だねえ？おめかししちやって：もしかして男？」

ミカ 「うん！しかもとびきりイケメンの！」

母 「へえ：しっかり捕まえてきなさいよ」

ミカ 「もっちらん！（言いながら出かける）」

弟 「ねーちゃんがスカートなんて：」

○都会 屋外のカフェテリア 夜七時ごろ

ミカ、テーブルでスマホをいじっている。画面には「ごめん遅れる」の文字。

ミカ 「顔は最高なのになあ……」

頬杖をついてため息をつくミカ。

そこへシバタ（18）がやってくる。

シバタ 「わり、待たせた」

ミカ 「あっ、大丈夫です先輩！私も今来たところなん  
で……」

シバタ 「さて、さっそく飯にいきましょうか」

ミカ 「うーん、今から間に合いますか？ライトアップ  
八時からですよ」

シバタ 「大丈夫だって。あと一時間あるし急いで食べば  
間に合うよ」

ミカ 「そ、そうですね……。じゃ行きますか！」

ミカ席を立ち、二人は立ち去る。

その様子を離れてみているアラギ。アラギがスマホをかざしてミカを画面内に捉える。するとレントゲン写真のようにミカのシルエットが白く映っており、パンツ部分が真っ黒に表示されている。

アラギ 「……パンツか！？」

大声で叫ぶアラギ。周りが怪訝な顔で彼を見つめる。アラギそれを意に介さず、スマホをしまつてミカ達を追いかける。

。都会 人通りの少ない路地裏 夜

スマホ見ながら歩いているミカとシバタ。小さいビル前で足を止める。

シバタ 「ここだよな……。あれ？閉店って書いてある……。マジかよ」

ミカ 「え？潰れちゃったの？そんな……」

シバタ 「しゃあない別のところに……」

そこへアラギが現れる。

アラギ 「おい……その女」

ミカ 「え……な、なに？」

シバタ 「な、なんだおめー」

アラギ 「今すぐに（ミカのスカートを指さして）スカート  
トをめくれ」

ミカ 「……は？」

アラギ 「いいから早くしろ！」

そう言いながらミカに近づく。

シバタ 「何言ってやがんだこの変態野郎！」

シバタ、アラギに掴みかかるがかわされて一本背負いされる。

シバタ 「うげえ！」

ミカ 「せ、先輩！」

アラギ 「早くしろと言ってるだろう！」

そう言いながら懐から銃を取り出しミカのスカートに銃口を向ける。

シバタ 「ひ、ひいいい！」

シバタ銃を見て一目散に逃げ出す。

ミカ 「あっ、せ、先輩：！？」

逃げていくシバタを見つめるミカ。その前にアラギが立ち塞がる。

アラギ 「さあ！早くスカートを：むっ！？」

路地裏から二人の男が現れる。その眼は赤く光っている。

アラギ 「くそ、忙しいってのに！」

男二人はミカに襲い掛かる。ミカおどろいて逃げようとするが掴まれてしまう。しかしアラギが男を蹴り飛ばしミカを助ける。もう一人の男はアラギに襲い掛かるがアラギ攻撃をかわして殴り飛ばす。

アラギ 「大丈夫か？」

ミカ 「：え、う、うん」

ミカがそういうとアラギは倒れている二人に銃を向ける。

ミカ 「ち、ちょっと！それはやりすぎよ！（止めようとする）」

アラギ 「邪魔をするな。いいか？よく見てろ」

ミカを制止しつつ倒れている二人に銃を撃つアラギ。光線が二人に命中し黒い影が霧散する。すると二人の目の赤い光が消え、気絶する。

ミカ 「え：？何今の」

アラギ 「いいか、簡単に説明する。やつらは人に寄生して体に乗っ取る化け物だ。我々はカゲと呼称している」

ミカ 「かげえ？」

アラギ 「そうだ、俺達は奴らを追い、始末し、民間人を守るのが任務だ」

ミカ 「新しいタイプのユーチューバー？」

アラギ 「違う！秘密警察とも思ってくれればいい」

ミカ 「その秘密警察が何であたしのスカートめくろうとするのよ？」

アラギ 「カゲは人だけでなく黒い物体にも乗り移れるんだ。どうやら俺が逃がしちまったカゲはお前のパンツに乗り移ってるらしい」

ミカ 「え？…ええええ？？」

アラギ 「そのうち奴はパンツごとお前の体を奪うつもりだ。そうなる前に…」

ミカ 「そ、その銃で私のパンツを撃てばいいってこと？」

アラギ 「その通りだ。カゲは光に弱い。この特殊光線銃なら始末できるというわけだ。事の重大さが理解できたか？」

ミカ 怪訝な顔で見ながらも頷く。

アラギ 「なら早くスカートをめくってパンツを見せろ」

ミカ 「い、いやよこの変態！もしそれが本当だったとしてもなんでそんなこと」

アラギ 「そんなこと言ってる場合か！」

その時ミカの眼が見開き、その後俯く。

アラギ 「ん、どうした…？」

ミカ 「…：…な、ならその銃貸して…自分でやるから…」  
アラギ少し戸惑うが銃を渡す。

ミカ 「あっち向いててよ変態！」

アラギ 黙って反対側へ向く。ミカそれを確認した後で眼を赤く光らせる。そのままアラギの後頭部を銃で殴る。

アラギ 「うぐっ！？」

アラギ 倒れる。ミの体に乗っ取ったカゲが頭を踏みつける

アラギ 「く…！お前は…！」

カゲ 「はっはっは、油断したな。もうこの女は俺が頂いた。そこで寝てな」

カゲ 銃を持ったまま逃亡する。

アラギ 「くそ…逃がすか！」

アラギ 起き上がりスマホを取り出し追う。

。ミカの世界

自分の視界を眺めているミカ。魔の前でアラギが殴り倒されるシーンが映る。

ミカ 「ああ！なんてことするのよ！」  
カゲ 「（声が響く）まだ意識があるのか。しぶとい女め」

ミカ 「私から出てけ！」

カゲ 「断る。お前のパンツも体も居心地がいいんでな。俺の次の体に決めた」

ミカ 「あくもう変態ばかりじゃないの！もういや！」  
カゲ 「む：くそ、もう追ってきたか！」

ミカ、自分の視界にアラギを見つける。

ミカ 「あいつ：」

○ビル内 夜

非常階段を駆け上るカゲ。それを追いかけるアラギ。

カゲ 「しつこい野郎だ：しかしこっちには人質がいるんだぜ？」

カゲ、ニヤリと笑って階段を登り屋上へのドアを開ける

○ビル屋上

アラギ、ドアを開けて屋上にくる。屋上にはカゲが手すりに背もたれして待っている。

アラギ 「もう逃がさんぞ」

カゲ 「ふん、お前の切り札はここだぞ？（銃を見せて）それに：」

カゲ、手すりから身を乗りだす。

カゲ 「この女が落ちて死んでもいいのかな？」

アラギ 「：貴様！」

たじろぐアラギ

○ミカの精神世界

ミカ、目の前で躊躇うアラギを見ながら

ミカ 「人の体で好き勝手して：絶対許さん！何とかこいつを：ん？」

ミカの視線が止まる。そこには大きな街頭時計が夜七時五十九分を指している。

ミカ 「そ、そうだ！」

。ビル屋上

ビルの縁に立ち、屋上のアラギの方を向いていたカゲ、ゆつくりと反対側を向く。

カゲ「むっ?!」

それを見たアラギが叫ぶ。

アラギ「や、やめる! わ、わかった! 追跡を中断する: だからやめる!」

カゲ「お、女あ! 何をするつもりだ?」

カゲ、体を動かそうとするが

ミカ「ふぎぎ: こんのお!」

ミカに阻まれ、カゲ思い通りにミカの体を動かせない。その様子を見たアラギ、駆け出そうとする足を止める

ミカ「もう少し: もうすぐ: !」

カゲに操られた手を無理やり動かしてスカートに手をかけるミカ

。ビル下の広場

民衆が笑顔で団欒している。カップル達は席に座りビルを見つめている。小さな女の子が父親に駆け寄る。それを肩車する父親。

父親「もうすぐだよー。もうすぐあのビルがピカーって綺麗に光るからね」

娘「まだー? 早く見たいよ」

父親「あと一分: もうちよつとだよー」

。ビル屋上

ミカ、ビルの外側を向いてスカートに手をかける。ミカの視線の先で街頭時計が夜八時を指す。

ミカ「これでも: くらええー!」

叫んでスカートを捲るミカ。同時にミカ達がいるビルの周囲のビルからサーチライトが光り、屋上のミカ達を照らし、ミカ達のビルもライトアップされる。

カゲ「う、うぐわああ! ! !」

アラギ「こ、これは: ? !」

何が起こったかわからず眩しさを手で顔を覆うアラギ。

×××

ビル下の広場。民衆がライトアップされたビルを見てはしゃいでいる。

×××

カゲ「ぐううっ！」

カゲ、ミカの体から黒い球体となって出ていく。同時にミカは体の自由を取り戻す。

ミカ「今よ！（持っていた銃を投げる）」

アラギ「ッ！（銃を受け取り）上出来だ！」

狙いを定めてカゲの球体を撃つアラギ。

カゲ「うぎゃああー！」

光線が命中してカゲは消滅する。ふうとため息をつくアラギ。

ミカ「や、やるじゃん（アラギにサムズアップ）」

アラギ「礼を言う。ヤツを始末できた」

アラギ、フツと笑って銃をしまう

ミカ「おっ：今気づいたけどよく見たらけっこうイケメンじゃん：あ、名前！まだ聞いてなかった」

アラギ「名乗る必要はない」

そう言って立ち去るアラギ。ミカ茫然と見送る。

ミカ「あ！ちよっと！お礼したいし連絡先くらい：行っちゃった！」

夜景を一人眺めてため息をつくミカ。

ミカ「あーあ：。今日はさんざんだったなあ。ケーキでも買って帰ろうと：」

とぼとぼと階段へと向かうミカ。スマホが鳴り、取ると母から「デートは楽しいかい？」とメッセージが来ている。ミカは「初デートでどんな人かわかって良かったよ」と返信。スマホをしまい、屋上を後にする。

終